3．中高生の規範意識についての多変量解析による考察

静岡大学教育学部教授
馬居　政幸

1　分析の観点と手法

青少年の規範意識の低下が指摘されて久しい。しかし、その実態についてどこまで明らかになっているか。日常の様々な場面で出会った常識外れの言動への憤りや、旧来の常識では理解できない事件の報道に対するやりきれない思いの反映のレベルに止まっていないだろうか。

いつの時代も若者は年長の世代から批判の対象とされてきた。そのことと、現在言われる規範意識の低下の問題はどこが異なるのか。

本調査はこのような疑問に答えるために、多変量解析による分析を試みた。

通常の調査では、知りたい内容を質問文にして、その回答結果を集計することから傾向を分析する手法がとられることが多い。それに対して、さまざまな場面における回答者の選択傾向を相互に比較しながら、その個々の回答の背後にある意識や行動の全体構造を明らかにするための分析手法として考案されたのが多変量解析である。特に、数量化Ⅲ類と名付けられる分析手法は、価値意識の構造や行動類型を析出するうえで優れた方法として用いられる。具体的には、日常誰もが出会うと思われる場面を数多く設定し、それぞれの場面で二者択一の選択肢を用意して回答を求める。その選択した結果を、コンピュータを用いて個々別々ではなく、全体として総合的に分析することから、調査対象者全体の意識や行動の隠れた傾向や構造を浮き彫りにする。

本調査では、このような多変量解析（数量化Ⅲ類）による分析を用いて、中・高校生の規範意識の構造や行動類型を析出することから、冒頭の疑問に答えることができると考え、そのための質問を用意した。それが、中・高校生用の調査票問 12 にある 18 項目にわたる二者択一の問いである。各問いの内容や集計結果については、本報告書の 46 ページから 49 ページを参照いただきたい。ここでは、問 12 の結果に対する多変量解析の分析過程とその結果明らかになった傾向をできるだけ主観を交えず、評価することなく紹介したい。その理由は、青少年のみでなく、規範意識に代表される価値意識やそれに基づく行動様式というのは、世代や文化や時代によって大きく異なるからである。ある人にとっては問題としてとらえられることでも、別の人からみれば当然とされることも多い。まして、現在の日本の社会は、現状の転換の必要性においては同意されても、その具体的な方向についてはいまだコンセンサスを得ているとは言いがたいのではないか。そのため、本書の役割を具体的な対策ではなく、それを考えるための基礎資料を提示することに止めたい。

もっとも、調査設計の当初からかかわった者として、緊急に対処すべき施策の案がないわけではない。だがそれは、調査結果の必然として出てくるものではなく、分析者の価値観が大きくかかわることを避け得ない。すなわち、具体的に今すぐに求められる対策、中長期的な視野に基づく施策や運動、いずれにせよそのあり方や是非の判断は、実証的なデータを用いつつも、さまざまな他の社会的条件や価値観、あるいは子ども像や未来像を総合的に加味することから生まれるものである。またそうでなければならない。調査結果の安易な一般化、そしてそれに基づく短絡的な施策化は、問題の本質を見誤り、問題解決に寄与しないばかりか、その対策がまた新たな問題を生むという悪循環に陥る危険性があるからである。

子どもたち、そして若者は、今ではなく未来を生きる者である。その不可解な行動は、未来への準備ととらえることも可能である。彼ら彼女らの何が問題で、何が課題なのか。あくまで過去や現在ではなく、未来の基準から判断しなければならない。だが、その未来の基準が未だ不明瞭だとすれば、何を基準に考えれば

よいのか。

これから紹介する調査結果についての多変量解析に基づく中・高校生の意識や行動の傾向が、彼ら彼女らの可能性を開く資料として生かされることを願って、あえて上記の断り書きを付記したことをご理解願いたい。

なおコンピュータによる分析では、世界的に最も一般的に使用されているＳＰＳＳという統計ソフトを用いる。そのため、ＳＰＳＳの統計パッケージのなかにある数量化Ⅲ類と同質の等質性分析を使用し、各設問の選択肢の数量化と、各設問の回答に基づくサンプルごとの数量化という２つの数量化を実施する。その上で、似たような回答傾向を示す調査対象者をグループ化するために考案されたクラスタ分析という手法を用いる。その際に、特にデータ量が膨大であるため、階層クラスタ分析ではなく非階層クラスタ分析（ＳＰＳＳでは大規模ファイルのクラスタ分析）を使用する。

この手法は、クラスタの数を事前に指定しておく必要があるため、３種～９種のクラスタを指定し、それぞれに分析を試みた。なお、このクラスタ分類の精度を検証するために判別分析を行ったところ、３種～９種のいずれの場合においても95％以上のあてはまりの良さを示しており、分析には有意な分類であることが確認された。

本分析では、以上の分析結果を検討することにより、主に９クラスタに分類した結果が最も現在の中・高校生の規範意識を解明するうえで有効と判断し、他の設問とのクロス集計を行いながら分析を進めた。

２　中・高校生の規範意識や行動様式を枠付ける基準の析出

問12を構成する18種36個の選択肢の結果に対して、数量化Ⅲ類による分析（等質性分析）を試みたところ、２つの要素に対する得点が得られた（表－１・Ⅰ軸得点、表－２・Ⅱ軸得点）。これは18種36個の質問が相互にどのような関係にあるかを数値で示したものである。それが２本の軸上にあるということは、この２つの軸それぞれにそって与えられた数値の順番に36の選択肢を並べ、その傾向を読み取ることから、調査対象者の意識の中にある２つの判断基準の枠組みが析出されることを意味する。

そこでまずⅠ軸上の得点を見ていくと、表－１が示すように、得点上位には次の項目が並んでいる。

「授業中友だちが話しかけてきた時は授業中と注意する」

「電車に乗っていて携帯電話がかかってきた時電話に出ない」

「友だちが自転車の二人乗りをしたいと言ってきた時は拒否する」

逆に得点下位は次のようである。

「電車で友だちが床に座った時一緒に床に座る」

「友だちからもらったノートが万引きしたものとわかった時使わない」

「買ったばかりの参考書をなくしてしまった時あきらめて買う」

プラスの数値の高い項目は、いずれも現在の社会常識から考えて妥当と思われる行為であり、逆にマイナスの数値の高い項目は社会的に認められない行為と言えよう。その意味で、Ⅰ軸を現在の社会の中に既に存在する規範（常識）に従う（同調）か従わない（逸脱）かという判断基準の枠組みとして位置づけ、「既存規範同調－既存規範逸脱」の軸と名付けたい。

同様に、各選択肢に対してⅡ軸上に与えられた得点の順に見ていくと、表－２にまとめてあるように、プラス数値が最も高い順から次のようになる。

「友だちがいじめにあっていることを知った時、味方にならない」

「道で近所の人を見かけた時、挨拶しない」

「友だちが自転車の二人乗りをしたいと言ってきた時、拒否する」

また、マイナス数値が高い順では、次のようになる。

「捨て犬を見つけた時、世話をする」

「電車で疲れて座っているところにお年寄りが乗ってきた時、席をゆずる」

「夜遅くに友だちから会いたいと電話があった時、会いに行く」

このことからⅡ軸は、友だち、近所の人、お年寄り、捨て犬など、自分以外の人やものが求めることを優先するか、自分の都合の方を優先するか、という判断基準にかかわる枠組みであることが読み取れる。そこで、Ⅱ軸を、人やものとの関係をもつことを重視するか、関係をもたないようにすることを選択するかという判断基準の枠組みとして位置づけ、「関係志向－自己志向」と名付けたい。

表－1・各質問の選択肢に与えられたⅠ軸得点

既存規範同調

	質　問	選　択	Ⅰ軸
(1)	7．①授業中に友だちが話しかけてきた時	授業中と注意	1.25
(2)	18．②電車に乗っていて携帯電話がかかってきた時	電話に出ない	0.76
(3)	11．②友だちが自転車の二人乗りをしたいと言ってきた時	二人乗りを拒否	0.72
(4)	9．②友だちからもらったノートが万引きしたものとわかった時	万引品非使用	0.56
(5)	8．①夜遅くに友だちから「会いたい」と電話があった時	夜は断る	0.49
(6)	2．①学校のしたく	前日したく	0.35
(7)	17．①電車で疲れて座っているところにお年寄りが乗ってきた時	席をゆずる	0.35
(8)	10．②電車で友だちが床に座った時	床に座らない	0.27
(9)	6．②友だちに自分の短所を指摘された時	直そうと思う	0.21
(10)	15．①両親が風邪をひいて寝込んでいる時の夕食	作って食べる	0.20
(11)	16．①道で近所の人を見かけた時	挨拶する	0.17
(12)	1．①学校がある日の朝	自分で起きる	0.16
(13)	3．①一緒に学校に通っている友だちとけんかをした時	自分から謝る	0.15
(14)	12．②買ったばかりの参考書をなくしてしまった時	発見まで探す	0.15
(15)	4．②友だちがいじめにあっていることを知った時	味方になる	0.14
(16)	13．①捨て犬を見つけた時	捨て犬を世話	0.12
(17)	5．②友だちは100点を取ったのに自分は取れなかった時	くやしい	0.09
(18)	14．②「男はたくましく、女はやさしい」という考え方	性で決めない	0.04
(19)	13．②捨て犬を見つけた時	捨て犬は放置	-0.08
(20)	5．①友だちは100点を取ったのに自分は取れなかった時	感心する	-0.09
(21)	14．①「男はたくましく、女はやさしい」という考え方	男と女は違う	-0.13
(22)	1．②学校がある日の朝	起こしてもらう	-0.14
(23)	7．②授業中に友だちが話しかけてきた時	一緒に話す	-0.21
(24)	6．①友だちに自分の短所を指摘された時	言われなくてもわかっている	-0.23
(25)	3．②一緒に学校に通っている友だちとけんかをした時	謝らせる	-0.32
(26)	8．②夜遅くに友だちから「会いたい」と電話があった時	夜でも会う	-0.33
(27)	2．②学校のしたく	当日したく	-0.34
(28)	15．②両親が風邪をひいて寝込んでいる時の夕食	コンビニか出前	-0.36
(29)	16．②道で近所の人を見かけた時	挨拶しない	-0.37
(30)	11．①友だちが自転車の二人乗りをしたいと言ってきた時	二人乗りする	-0.39
(31)	4．①友だちがいじめにあっていることを知った時	味方にならない	-0.40
(32)	18．①電車に乗っていて携帯電話がかかってきた時	電話にでる	-0.41
(33)	17．②電車で疲れて座っているところにお年寄りが乗ってきた時	席をゆずらない	-0.53
(34)	12．①買ったばかりの参考書をなくしてしまった時	あきらめて買う	-0.67
(35)	9．①友だちからもらったノートが万引きしたものとわかった時	万引品使用	-0.68
(36)	10．①電車で友だちが床に座った時	床に座る	-0.88

既存規範逸脱

の選択肢に　　1

自己志向

	質　問	選　択	II軸
(1)	4. ①友だちがいじめにあっていることを知った時	味方にならない	0.62
(2)	16.②道で近所の人を見かけた時	挨拶しない	0
(3)	11.②友だちが自転車の二人乗りをしたいと言ってきた時	二人乗りを拒否	0.58
(4)	3.② 一緒に学校に通っている友だちとけんかをした時	らせる	3
(5)	17.②電車で疲れて座ってしーヽるところにお年寄りが乗って	をゆずらない	-0.56
(6)	8. ①夜遅くに友だちから「会いたい」と電話があった時	は断る	0.50
(7)	7.①授業中に友だちが話しかけてきた時	授業中と注意	0.44
(8)	13. ②捨て犬を見つけた時	捨て犬は放置	0.44
(9)	15.②両親が風邪をひいて寝込んでいる時の夕食	コンビニか出前	0.44
(10)	6.①友だちに自分の短所を指摘された時	言われなくてもわかっている	0.36
(11)	12.①買ったばかりの参考書をなくしてしまった時	あきらめて買う	0.19
(12)	5.②友だちは100点を取ったのに自分は取れなかった時	くやしい	0.20
(13)	18. (2)週車に乗っていて携帯電話がかかってきた時	電話に出ない	0.12
(14)	9.②友だちからもらったノ ー トが万引きしたものとわかった時	万引品非使用	0.08
(15)	10.②電車で友だちが床に座った時	床に座らない	0.08
(16)	14.②「男はたくましく、女はやさしい」という考え方	性で決めない	0.07
(17)	1.①学校がある日の朝	自分で起きる	0.02
(18)	2.②学校のしたく	当日したく	0.02
(19)	11. ②学校がある日の朝	起こしてもらう	-0.02
(20)	2.①学校のしたく	前日したく	-0.02
(21)	12.②買ったばかりの参考啓をなくしてしまった時	発見まで探す	-0.05
(22)	7.碑業中に友だちが話しかけてきた時	一緒に話す	-0.07
(23)	18. G濾車に乗っていて携帯電話がかかってきた時	電話にでる	-0.01
(24)	9.①友だちからもらったノ ー トが万引きしたものとわかった時	万引品使用	-0.10
(25)	4.②友だちがいじめにあっていることを知った時	味方になる	-0.20
(26)	5.①友だちは100点を取ったのに自分は取れなかった時	感心する	-0.21
(27)	14.①「男はたくましく、女はやさしい」という考え方	男と女は違う	-0.21
(28)	3. <D-緒に学校に通っている友だちとけんかをした時	自分から謝る	-0.24
(29)	15.①両親が風邪をひいて寝込んでいる時の夕食	作って食べる	-0.24
(30)	10.①電車で友だちが床に座った時	床に座る	-0.26
(31)	16. (I)週で近所の人を見かけた時	挨拶する	-o.2a
(32)	11.①友だちが自転車の二人乗りをしたいと百ってきた時	二人乗りする	-0.31
(33)	6.②友だちに自分の短所を指摘された時	直そうと思う	-0.33
(34)	8.碑遅くに友だちから「会いたい」と電話があった時	夜でも会う	-0.33
(35)	17.①電車で疲れて座っているところにお年寄りが乗ってきた時	席をゆずる	-0.33
(36)	13..①捨て犬を見つけた時	捨て犬を世話	-0.63

関係志向

※この 2つの軸は、0.00001 の収束基準に対し 8 回の反復で算出され、寄与率は、I軸が69.5%、II軸が30.5%である。なお、この時点で各設問の回答に基づくサンプルごとの数呈化も行われており、選択肢の数量化と同様にI軸(「既存規範同調 ー 既存規範逸脱」)、II 軸 (「関係志向一自己志向」) に対する得点が1,260サンプルごとに付けられている。

3　数量化によって析出された２つの軸に基づく中・高校生の類型化

上記の数量化による２つの軸の析出に次いで、クラスタ分析を行った。

具体的には、まず析出されたⅠ軸（「既存規範同調－既存規範逸脱」）とⅡ軸（「関係志向－自己志向」）という２つの軸をＸ軸、Ｙ軸におきかえ、二次元グラフを作成する。次いで、その平面上に36個の選択肢に与えられた得点をプロットする。そしてその空間上に、調査対象者に対する数量化により得られた 1,260名の対象者ごとの得点を用いて、似たような回答傾向を示す調査対象者のグループ分け行う。このような作業をコンピュータを用いて行う統計手法がクラスタ分析である。

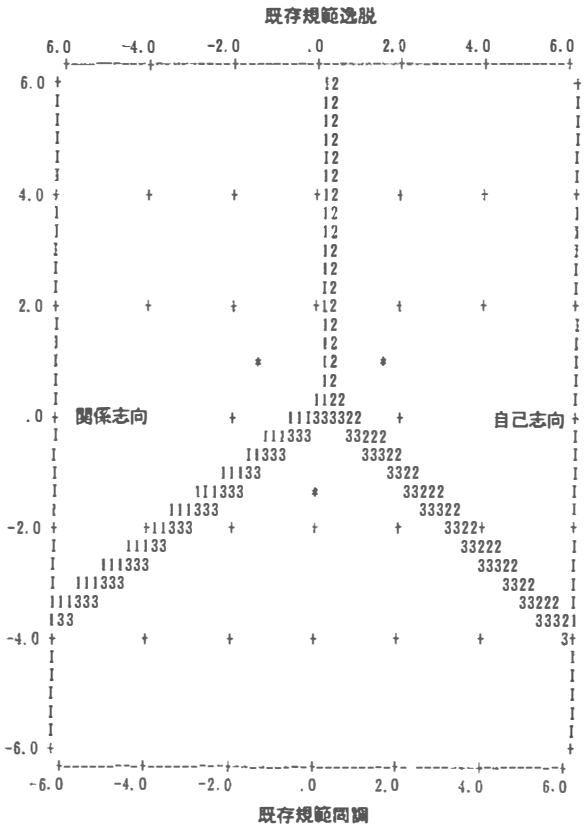
この分析では、いくつの固まり（クラスタ）にするかは、分析者が決定することになっているため、先述したように、まず３つに分けることから始め、１つずつ分ける数を増やし、それぞれの特性を確認していった。その結果、９つに分けた時点で最小クラスタに属する対象者の数が100名を切ったため、統計の精度上限界に近いと判断し、10分割以上のグループ分けは中止した。

なお、３～９分割の形状や特性については、上述したように、Ⅰ軸上の得点とⅡ軸上の得点を平面上のＸ軸、Ｙ軸におきかえて区分した領域マップ（図－１～７）により確認することができる。ただし、コンピュータ処理の都合上、図によってⅠ軸・Ⅱ軸の配置や軸の向きが変化しているので注意してご覧いただきたい。

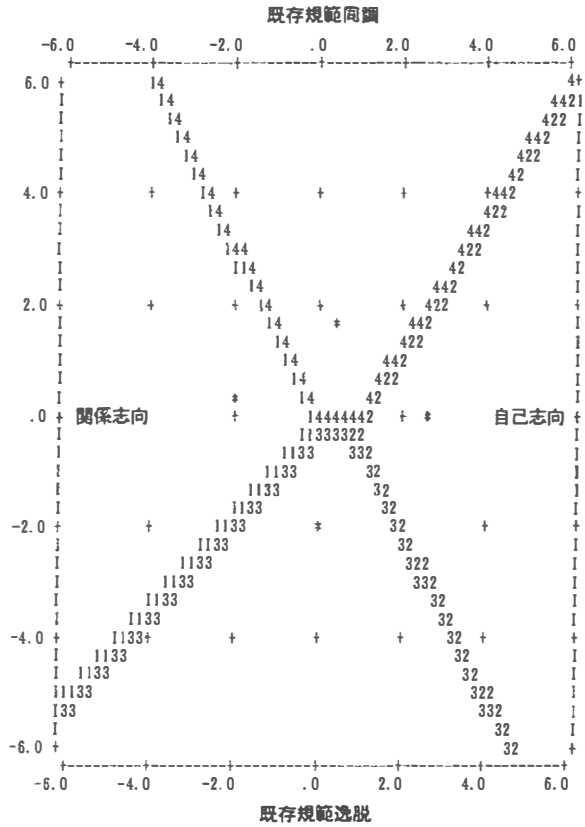
●３分割した場合（図－１）、既存規範に同調するクラスタ、及び既存規範を逸脱し関係志向のクラスタと自己志向のクラスタに分類されている。これは、寄与率の高い既存規範の軸に対してまず２分され、その後寄与率の低い関係志向・自己志向の軸で２分された結果である。

●４分割した場合（図－２）、既存規範に同調、既存規範を逸脱、関係志向、自己志向と、スムーズに４分類されている。

図－１・３分割



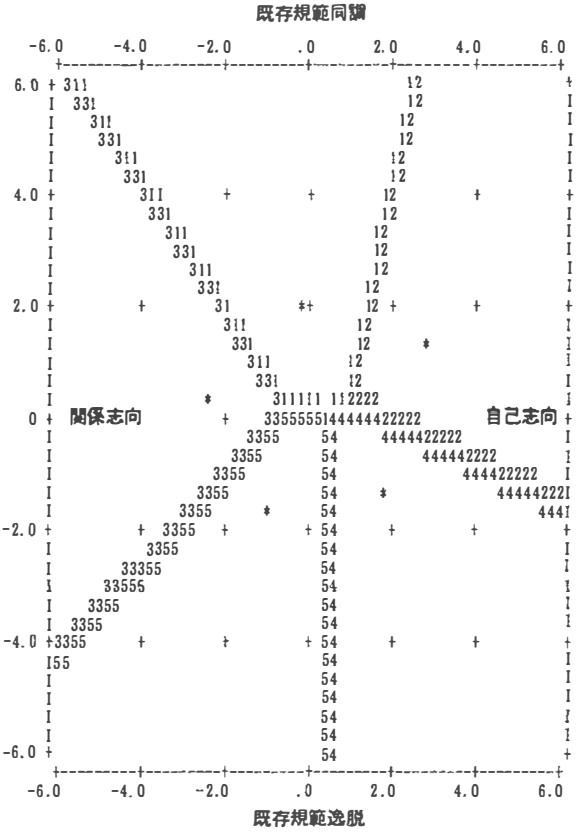
図－２・４分割



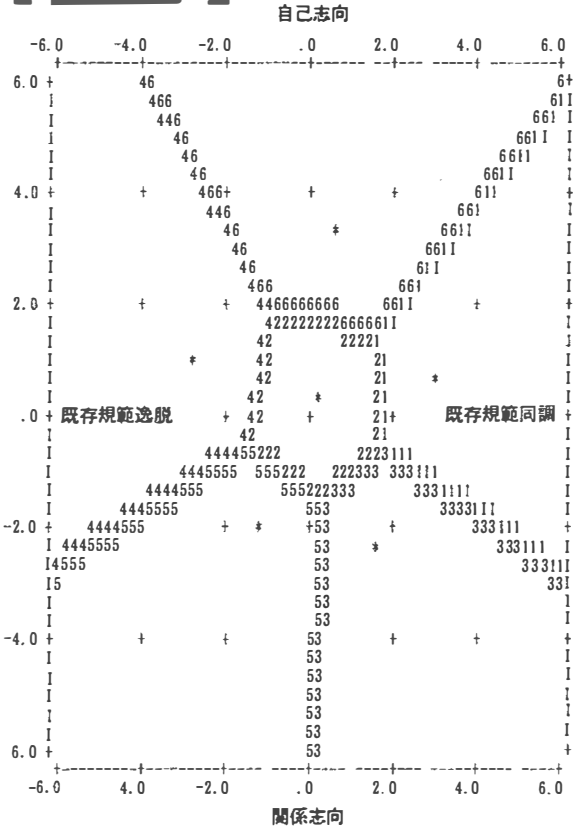
●５分割した場合（図－３）、既存規範を逸脱するクラスタが、関係志向のものと自己志向のものに分類されている。

●６分割した場合（図－４）、これまで２つの軸に対して特性を持ったクラスタに分けられていたが、領域マップの中央にⅠ軸に対してもⅡ軸に対しても得点の少ない、特性のないクラスタが現れているのが特徴的である。他のクラスタはほぼ４分割した場合に近いものの、関係志向のものが既存規範に同調するクラスタと逸脱するクラスタに分類されている。

図－３・５分割



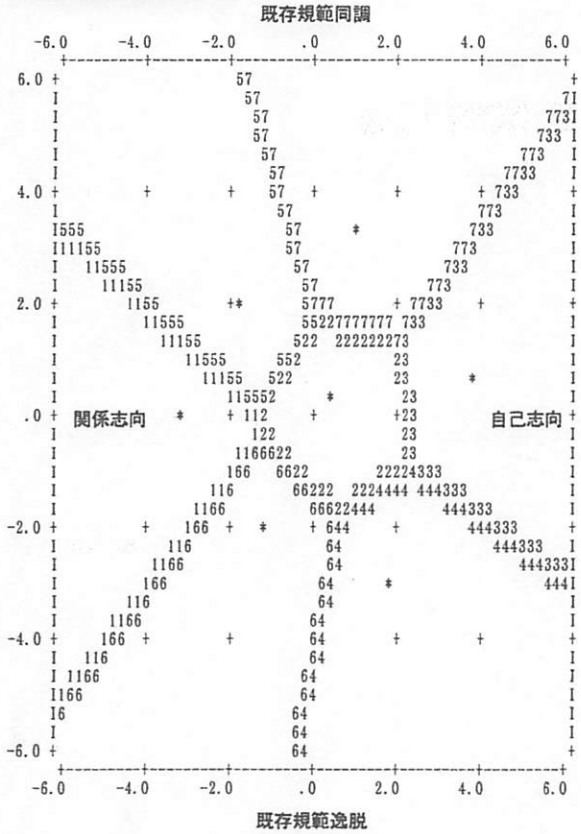
図－４・６分割



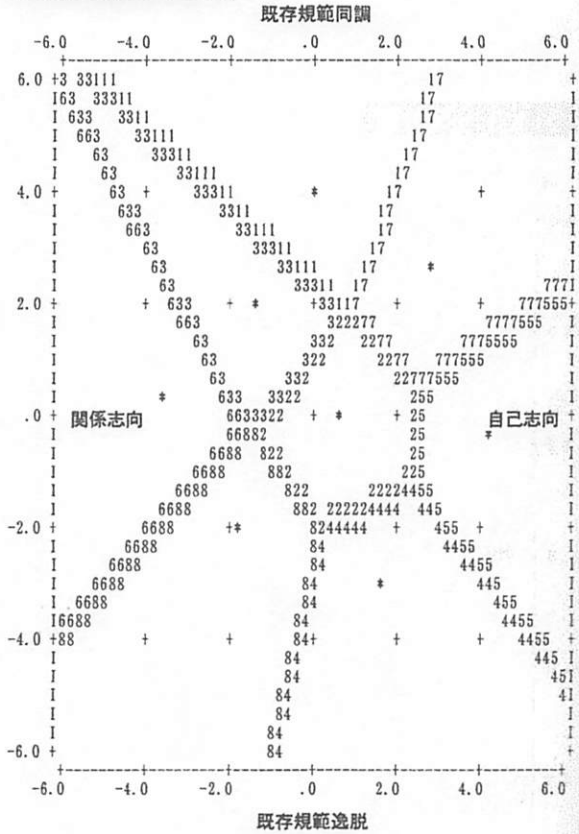
●７分割した場合（図－５）、中央のクラスタをほぼ維持しつつ、関係志向のクラスタ、自己志向のクラスタに分類され、他の４つのクラスタは、既存規範に同調しながら関係志向、自己志向、既存規範を逸脱しながら関係志向、自己志向に分類されている。

●８分割した場合（図－６）、中央のクラスタをほぼ維持しつつ、７分割に比べて既存規範に同調で関係志向のクラスタが２分されている。

図－５・７分割

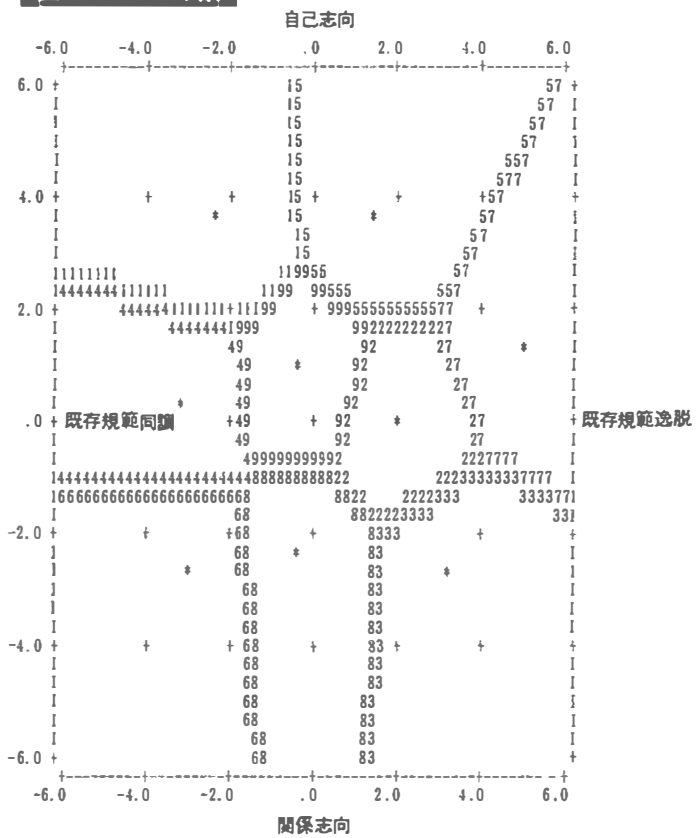


図－６・８分割



●９分割した場合（図－７）、中央に２つのクラスタが現れている。他の７つのクラスタはこれまでと明らかに異なる分類がなされ、自己志向で既存規範に同調、逸脱のもの、既存規範に同調のもの、関係志向のもの、関係志向で既存規範に同調、逸脱のもの、自己志向で既存規範をやや逸脱するもの、既存規範を逸脱し、やや自己志向のものとなっている。

図－７・９分割



次に、３～９に分割したそれぞれのクラスタが中・高校生別、性別にどのような特徴があるか、中・高校生別、性別のクロス集計により分析した。この作業により、９分割のものが非常に特徴のあるものとなったため、以降は９分割したものについて分析していく（図－８）。

４　９種のクラスターの特性

（１）全体の傾向

中央に現れたクラスタは第２クラスタと第９クラスタで、それぞれ155 名、183 名が属し、全体の26.8%を占めている。

中・高校生・性別に大きな偏りはないが、第２クラスタは男性、第９クラスタは女性が比較的多くなっている。

第１クラスタは、既存規範に同調し、自己志向に偏っており、中学生が多くなっている。

第３クラスタは、既存規範を逸脱し、関係志向に偏っており、高校生男性が多くなっている。

第４クラスタは、既存規範に同調するものの、関係志向・自己志向の軸に対しては中間に位置し、女性が多くなっている。

第５クラスタは、既存規範を逸脱し、自己志向に偏っており、中学生男性が多くなっている。

第６クラスタは、既存規範に同調し、関係志向に偏っており、やや女性が多くなっている。

第７クラスタは、既存規範を逸脱し、やや自己志向に偏っており、男性が多く、最も少ない73 名が属している。

第８クラスタは、既存規範の軸に対しては中間に位置し、関係志向に偏っており、高校生が多くなっている。

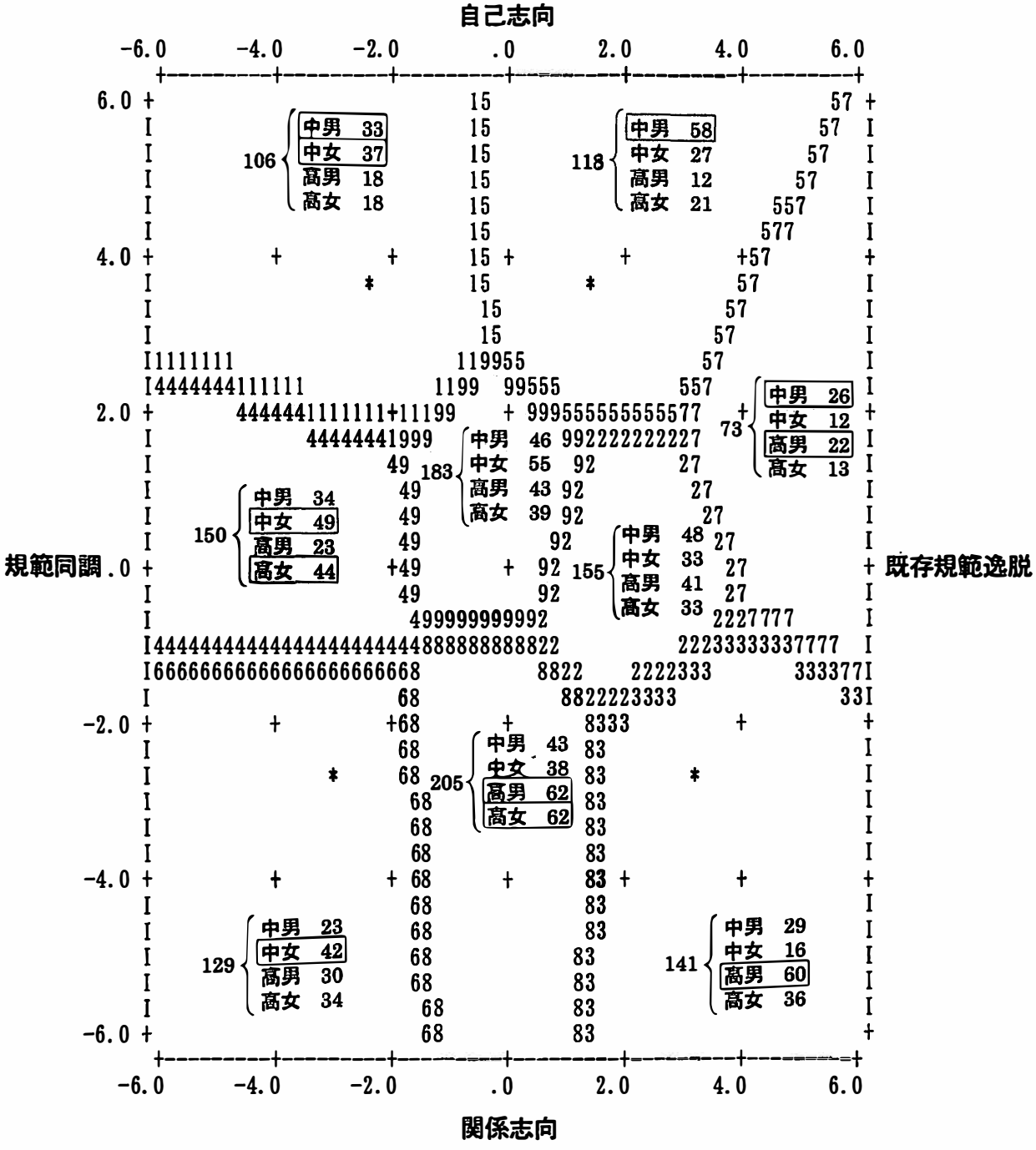
これらを総合すると、まず、既存規範に同調する傾向は女性に強く、逸脱する傾向は男性に強くなっている。また、中学生は既存規範に同調傾向にあり、高校生は関係志向が強くなっている。

そのため、女性は既存規範に同調しながら、中学生から高校生になるにつれて自己志向から関係志向へと移り変わる傾向があることが読み取れる。図－８で見ると、図の左上から左下にかけて反時計回りである。

男性は既存規範を逸脱したまま自己志向から関係志向へと移り変わる傾向があることが指摘できよう。図－８で見ると、図の右上から右下にかけて時計回りである。

ただし、これらは傾向であって、いずれのクラスタにも男性、女性、中学生、高校生が属し、男女の性差や中・高校生の差異を示すものではないことを確認しておきたい。

図－8・9分割の詳細


自己志向
-6.0 -4.0 -2.0 .0 2.0 4.0 6.0
6.0
4.0
2.0
規範同調 .0
-2.0
-4.0
-6.0
106 中男 33 中女 37 高男 18 高女 18
118 中男 58 中女 27 高男 12 高女 21
73 中男 26 中女 12 高男 22 高女 13
183 中男 46 中女 55 高男 43 高女 39
150 中男 34 中女 49 高男 23 高女 44
155 中男 48 中女 33 高男 41 高女 33
205 中男 43 中女 38 高男 62 高女 62
129 中男 23 中女 42 高男 30 高女 34
141 中男 29 中女 16 高男 60 高女 36
既存規範逸脱
関係志向

（２）各クラスタの特性

さらに各クラスタの特性を明らかにするために、グループ分けに使用した問12と９つのクラスタをクロス集計（表－３）することを試みた。これにより、どのような回答傾向によって９分割されたのかが把握できるとともに、前述の全体の傾向を裏付けることが可能になると考えたからである。

ここでは特に、問12の各質問項目の中で、他のクラスタと比較して突出して回答割合が高い項目を「かなり影響力のある項目」、また回答割合がやや高い項目を「やや影響力のある項目」としてとらえる。そして、各クラスタにどのような項目が、「かなり」もしくは「やや」影響力あるものとして位置づけられているかをみるために、クラスタごとに項目内容を列記しておきたい。

ところで、通常、このような数量化とクラスタ分析は、上記の手順に基づき各クラスタの特性を明らかにした後、各クラスタの特性に応じてそのクラスタに所属する典型的な人間類型を想定し、誰もが理解（想像）しやすいネーミングを施し、より鮮明に調査結果の分析から明らかになった課題をアピールすることが多い。本調査の分析においてもそのことを試み、部分的に発表も行った。しかし、その過程で、データが示すさまざまな課題を切り捨てざるを得えなかった。何よりも、クラスタの析出はコンピュータによる数量化に基づくものだが、それにネーミングするという作業は、分析者の価値観が非常に反映する。特に、子どもや若者の規範意識という微妙な問題について、安易なラベリングに内在する危うさについては、本稿の冒頭で指摘した。

そのため、一旦はネーミングまで分析を進めたものの、本報告書においては、分析の過程を提示するに止めることにした。言いかえれば、冒頭の断り書きの背後には、本調査の設計から分析にまでかかわってきた分析者自身の反省がある。とりわけ、上記の手順を経てネーミングの作業にとりかかり、さらには具体的な問題点やその解決方法にまで考察を進めようとしたときに調査結果や施策の方向をより明確に指摘するためにあまりにも多くの内容（実証データが示す）を捨象する一方で、データ以外の分析者の視点が次々と加味されていることを自覚せざるを得なかったからである。

したがって、以下の記述では、それぞれのクラスタの特性を理解する上で必要な項目を列記するにとどめたい。その解釈は本報告書を読まれる方にゆだねたい。

▼第１クラスタ（既存規範同調・自己志向・中学生・8.4％）

かなり影響力のある項目は、次の項目である。

「電車で友だちが床に座った時、自分は立っている」(99.1％)、
「買ったばかりの参考書をなくしてしまった時、見つかるまで探す」(98.1％)、
「友だちからもらったノートが万引きしたものとわかった時、絶対に使わない」(93.4％)、
「両親が風邪をひいて寝込んでいる時の夕食は、自分で作って食べる」(89.6％)、
「電車に乗っていて携帯電話がかかってきた時、電話に出ない」(82.1％)、
「学校のしたくは前の日にする」(76.4％)、
「学校がある日の朝、自分で起きるようにしている」(61.3％)、
「授業中に友だちが話しかけてきた時、授業中だよと注意する」(61.3％)、

やや影響力のある項目をあげると次のようになる。

「電車で疲れて座っているところにお年寄りが乗ってきた時、お年寄りに席を譲る」(94.3％)、
「友だちが自転車の二人乗りをしたいと言ってきた時、断る」(89.6％)、
「友だちがいじめにあっていることを知った時、自分までいじめられても友だちの味方になる」(88.5％)、
「一緒に学校に通っている友だちとけんかをした時、自分から謝って一緒に学校に行く」(81.7％)、
「友だちに自分の短所を指摘された時、素直に直そうと思う」(74.5％)、

「夜遅くに友だちから会いたいと電話があった時、断る」（72.4％）となっている。

▼第２クラスタ（偏りなし・男性・12.3％）

かなり影響力のある項目はない。

やや影響力のある項目は、「授業中に友だちが話しかけてきた時、一緒に話をする」（96.8％）の１項目のみとなっている。

その他の項目は、回答者全体の回答割合に近い値となっている。

▼第３クラスタ（既存規範逸脱・関係志向・高校生男性・11.2％）

かなり影響力のある項目は、

「授業中に友だちが話しかけてきた時、一緒に話をする」（98.6％）、

「友だちからもらったノートが万引きしたものとわかった時、そのまま使う」（93.6％）、

「電車に乗っていて携帯電話がかかってきた時、電話に出る」（92.2％）、

「夜遅くに友だちから会いたいと電話があった時、友だちに会いに行く」（90.7％）、

「学校のしたくはその日の朝にする」（83.7％）、

「両親が風邪をひいて寝込んでいる時の夕食は、コンビニのお弁当か出前を頼む」（65.7％）、

「学校がある日の朝、誰かに起こしてもらうことが多い」（63.8％）、

「電車で友だちが床に座った時、一緒に床に座る」（63.1％）、

「買ったばかりの参考書をなくしてしまった時、あきらめて新しく買う」（45.0％）、

「男はたくましく女はやさしいという考え方は、男と女は違うので当然だと思う」（33.3％）となっている。

やや影響力のある項目は、

「友だちが自転車の二人乗りをしたいと言ってきた時、乗せてあげる」（95.7％）、

「電車で疲れて座っているところにお年寄りが乗ってきた時、そのまま座っている」（80.1％）となっている。

▼第４クラスタ（既存規範同調・女性・11.9％）

かなり影響力のある項目は、

「電車で疲れて座っているところにお年寄りが乗ってきた時、お年寄りに席を譲る」（96.0％）、

「友だちがいじめにあっていることを知った時、自分までいじめられても友だちの味方になる」（94.0％）、

「道で近所の人を見かけた時、あいさつをすることが多い」（93.3％）となっている。

やや影響力のある項目は、

「買ったばかりの参考書をなくしてしまった時、見つかるまで探す」（94.0％）、

「電車で友だちが床に座った時、自分は立っている」（89.9％）、

「一緒に学校に通っている友だちとけんかをした時、自分から謝って一緒に学校に行く」（88.4％）、

「友だちからもらったノートが万引きしたものとわかった時、絶対に使わない」（86.7％）、

「友だちに自分の短所を指摘された時、素直に直そうと思う」（75.3％）、

「学校のしたくは前の日にする」（70.0％）となっている。

▼第５クラスタ（既存規範逸脱・自己志向・中学生男性・9.4％）

かなり影響力のある項目は、

「友だちが自転車の二人乗りをしたいと言ってきた時、断る」（90.7％）、

「夜遅くに友だちから会いたいと電話があった時、断る」(89.0%) となっている。

やや影響力のある項目は、

「電車で友だちが床に座った時、自分は立っている」(96.6%)、

「友だちからもらったノートが万引きしたものとわかった時、絶対に使わない」(88.1%)、

「男はたくましく女はやさしいという考え方は、男とか女とかで決めるのはおかしいと思う」(86.3%)、

「友だちは 100 点を取ったのに自分は取れなかった時、負けてしまってくやしいと思う」(65.3%)、

「授業中に友だちが話しかけてきた時、授業中だよと注意する」(45.8%) となっている。

▼第６クラスタ（既存規範・関係志向・女性・10.2%）

かなり影響力のある項目は、

「授業中に友だちが話しかけてきた時、一緒に話をする」(98.4%)、

「友だちが自転車の二人乗りをしたいと言ってきた時、乗せてあげる」(98.4%)、

「友だちがいじめにあっていることを知った時、自分までいじめられても友だちの味方になる」(94.5%)、

「一緒に学校に通っている友だちとけんかをした時、自分から謝って一緒に学校に行く」(93.8%)、

「捨て犬を見つけた時、とりあえず飼い主が見つかるまで自分が世話をする」(84.4%)、

「友だちに自分の短所を指摘された時、素直に直そうと思う」(79.7%)、

「友だちは 100 点を取ったのに自分は取れなかった時、頑張っているんだなと感心する」(65.6%) となっている。

やや影響力のある項目は、

「道で近所の人を見かけた時、あいさつをすることが多い」(96.1%)、

「電車で疲れて座っているところにお年寄りが乗ってきた時、お年寄りに席を譲る」(91.4%)、

「夜遅くに友だちから会いたいと電話があった時、友だちに会いに行く」(89.8%)、

「両親が風邪をひいて寝込んでいる時の夕食は、自分で作って食べる」(83.7%)、

「学校がある日の朝、誰かに起こしてもらうことが多い」(60.2%) となっている。

▼第７クラスタ（既存規範逸脱・やや自己志向・男性・5.8%）

かなり影響力のある項目は、「捨て犬を見つけた時、そのまま放っておく」(94.5%)、

「友だちに自分の短所を指摘された時、言われなくてもわかっていると思う」(87.7%)、

「男はたくましく女はやさしいという考え方は、男とか女とかで決めるのはおかしいと思う」(87.7%)、

「電車で疲れて座っているところにお年寄りが乗ってきた時、そのまま座っている」(86.3%)、

「道で近所の人を見かけた時、あいさつをしないことが多い」(76.7%)、

「一緒に学校に通っている友だちとけんかをした時、友だちが謝ってくるまで一緒に行かない」(76.4%)、

「友だちは 100 点を取ったのに自分は取れなかった時、負けてしまってくやしいと思う」(75.3%)、

「友だちがいじめにあっていることを知った時、自分までいじめられるのはいやだから友だちとのつきあいをやめる」(66.7%)、

「両親が風邪をひいて寝込んでいる時の夕食は、コンビニのお弁当か出前を頼む」(65.8%) となっている。

やや影響力のある項目は、

「授業中に友だちが話しかけてきた時、一緒に話をする」(91.8%)、

「電車で友だちが床に座った時、自分は立っている」(82.2%) となっている。

▼第８クラスタ（関係志向・高校生・16.3％）

かなり影響力のある項目は、「授業中に友だちが話しかけてきた時、一緒に話をする」（99.5％）の１項目のみとなっている。

やや影響力のある項目は、

「友だちが自転車の二人乗りをしたいと言ってきた時、乗せてあげる」（97.1％）、

「夜遅くに友だちから会いたいと電話があった時、友だちに会いに行く」（89.3％）、

「電車に乗っていて携帯電話がかかってきた時、電話に出る」（88.8％）、

「友だちがいじめにあっていることを知った時、自分までいじめられても友だちの味方になる」（83.3％）、

「友だちからもらったノートが万引きしたものとわかった時、そのまま使う」（73.5％）、

「友だちは 100 点を取ったのに自分は取れなかった時、頑張っているんだなと感心する」（59.3％）となっている。

▼第９クラスタ（偏りなし・女性・14.5％）

かなり影響力のある項目はない。

やや影響力のある項目は、「授業中に友だちが話しかけてきた時、一緒に話をする」（90.1％）の１項目のみとなっている。その他の項目は、回答者全体の回答割合に近い値となっている。

表－3・グループ分けに使用した問12に対する9クラスターごとの回答の割合

（%）

Q12 人数 （%）	① 106 (8.4)	② 155 (12.3)	③ 141 (11.2)	④ 150 (11.9)	⑤ 118 (9.4)	⑥ 129 (10.2)	⑦ 73 (5.8)	⑧ 205 (16.3)	⑨ 183 (14.5)	合計 1,260 (100.0) 平均
1－①自分で起きる	◎61.3	43.2	36.2	48.0	47.5	39.8	45.2	43.4	49.7	45.7
②起こしてもらう	38.7	56.8	◎63.8	52.0	52.5	○60.2	54.8	56.6	50.3	54.3
2－①前日仕度	◎76.4	47.1	16.3	○70.0	55.9	44.5	41.1	36.3	59.6	49.1
②当日仕度	23.6	52.9	◎83.7	30.0	44.1	55.5	58.9	63.7	40.4	50.9
3－①自分から謝る	○81.7	54.5	43.5	○88.4	63.6	◎93.8	23.6	76.8	71.3	68.7
②謝らせる	18.3	45.5	56.5	11.6	36.4	6.3	◎76.4	23.2	28.7	31.3
4－①味方にならない	11.5	40.9	45.6	6.0	27.1	5.5	◎66.7	16.7	20.3	24.4
②味方になる	○88.5	59.1	54.4	◎94.0	72.9	◎94.5	33.3	○83.3	79.7	75.6
5－①感心する	48.1	46.5	55.3	45.3	34.7	◎65.6	24.7	○59.3	44.8	48.9
②くやしい	51.9	53.5	44.7	54.7	○65.3	34.4	◎75.3	40.7	55.2	51.1
6－①いわれなくとも	25.5	58.1	70.0	24.7	54.2	20.3	◎87.7	47.5	50.8	47.4
②直そうと思う	○74.5	41.9	30.0	○75.3	45.8	◎79.7	12.3	52.5	49.2	52.6
7－①授業中と注意	◎61.3	3.2	1.4	16.0	○45.8	1.6	8.2	0.5	9.9	14.1
②一緒に話す	38.7	○96.8	◎98.6	84.0	54.2	◎98.4	○91.8	◎99.5	○90.1	85.9
8－①夜は断る	○72.4	41.9	9.3	40.0	◎89.0	10.2	67.1	10.7	53.6	39.9
②夜でも会う	27.6	58.1	◎90.7	60.0	11.0	○89.8	32.9	○89.3	46.4	60.1
9－①万引品使用	6.6	49.7	◎93.6	13.3	11.9	60.9	58.9	○73.5	26.9	45.3
②万引品非使用	◎93.4	50.3	6.4	○86.7	○88.1	39.1	41.1	26.5	73.1	54.7
10－①床に座る	0.9	18.7	◎63.1	10.1	3.4	34.4	17.8	40.0	10.9	23.6
②床に座らない	◎99.1	81.3	36.9	○89.9	○96.6	65.6	○82.2	60.0	89.1	76.4
11－①二人乗りする	10.4	67.5	○95.7	68.0	9.3	◎98.4	39.7	○97.1	57.4	65.4
②二人乗り拒否	○89.6	32.5	4.3	32.0	◎90.7	1.6	60.3	2.9	42.6	34.6
12－①あきらめて買う	1.9	21.3	◎45.0	6.0	13.6	14.0	30.1	24.9	11.5	18.7
②発見まで探す	◎98.1	78.7	55.0	○94.0	86.4	86.0	69.9	75.1	88.5	81.3
13－①捨て犬世話	50.0	18.1	24.5	75.0	11.9	◎84.4	5.5	50.0	31.7	40.8
②捨て犬は放置	50.0	81.9	75.5	25.0	88.1	15.6	◎94.5	50.0	68.3	59.2
14－①男と女は違う	19.0	22.6	◎33.3	27.3	13.7	31.8	12.3	29.8	27.9	25.5
②性で決めない	81.0	77.4	66.7	72.7	○86.3	68.2	◎87.7	70.2	72.1	74.5
15－①作って食べる	◎89.6	50.3	34.3	86.7	50.0	○83.7	34.2	71.7	67.8	64.7
②コンビニ出前	10.4	49.7	◎65.7	13.3	50.0	16.3	◎65.8	28.3	32.2	35.3
16－①挨拶する	90.6	53.5	44.7	◎93.3	50.8	○96.1	23.3	69.3	74.3	68.3
②挨拶しない	9.4	46.5	55.3	6.7	49.2	3.9	◎76.7	30.7	25.7	31.7
17－①席譲る	○94.3	32.9	19.9	◎96.0	47.5	○91.4	13.7	57.1	73.8	60.2
②席譲らない	5.7	67.1	○80.1	4.0	52.5	8.6	◎86.3	42.9	26.2	39.8
18－①携帯電話出る	17.9	79.4	◎92.2	39.3	31.4	82.9	76.4	○88.8	59.0	65.1
②携帯電話出ない	◎82.1	20.6	7.8	60.7	68.6	17.1	23.6	11.2	41.0	34.9

◎：かなり影響力のある項目

○：やや影響力のある項目

5　終わりにかえて

以上、各クラスタの特性を明らかにするために、クラスタ析出のために用意した問 12 の 36 個の質問選択肢とのクロス集計の結果をもとに、各クラスタに影響力がある項目の度合いに応じて列記してきた。クラスタによっては、非常に特性を明確に把握できるものもあれば、ほとんど顕著な傾向を読み取ることができないものもある。

特性がないということは、このクラスタに属する中・高校生に特性がないということではない。本調査で用意した質問によっては、顕著な特性を浮かび上がらすことができなかったということにすぎない。また、問題が規範意識の低下の状況である以上、特性がないということは、特に顕著な問題があるわけではない、ということを示唆しているのかもしれない。しかし、他方で、思春期という時期に、特に顕著な特性を示すことができないということは、現状においては平均値にあるものの、今後きたるべき新たな時代と社会の条件のもとでは、マイナス条件になり得る可能性もある。もちろん、その逆も考えられる。

他方、非常に特性が顕著な第１クラスタや第３クラスタも、それをどのように評価するかによって問題解決の方向は大きく変化する。どちらかと言えば優等生タイプの第１クラスタの場合、中学生が多いことから、中学から高校へと成長するにしたがって、既存の規範への同調が崩れ新たな規範を求めて模索する、というストーリーが浮かんでくる。このことは、第３クラスタによっても補強される。高校男子を中心に、既存規範に対する逸脱行動を存在証明（アイデンティティ）とするかにみえるこのクラスタに所属する者の行動は、多くの大人にとってまさに規範意識の低下という危惧を象徴するものとなろう。しかし、模範生が中学中心、問題生が高校中心ということは、規範意識の低下という問題の背景が、中学生や高校生という個々の主体にあるというよりも、現在の教育制度が既存の規範意識を社会化する上で機能不全に陥っているということにあるとも解釈できる。とすれば、問題の解決は個々の主体ではなく、教育制度のあり方にかかわってくる。

また、分析過程で最も気になったのは第７クラスタの存在である。他者との関係を断ち切ることで自己のアイデンティティを辛うじて維持しているかにみえるこのクラスタに所属する中・高校生に対して、「キレル」の言葉とともに一般化した「14 才」あるいは「17 才」の問題の温床となる危惧を抱いたことは事実である。加えて、逸脱行動として外の世界に自己の存在を明確にする第３クラスタと異なり、外見的にはむしろ模範生の第１クラスタに近いかもしれない第７クラスタの場合、突然問題が生じる。いわゆる「普通の子」が・・・ということになる。

また、全体として、中学から高校にかけて、既存の規範に対する逸脱行動が顕著である一方で、自己の外にある「ヒト・モノ・コト」との関係、とりわけ友だち関係に選択基準が移行していることも把握できる。次の時代を生きる者が、前の時代を生きる者の期待する既存の規範に批判的であることは、何も今に限ったことではない。まして変化を常として社会に生きる者にとって、むしろ既存秩序への逸脱こそアイデンティティの中核にならざるを得ないのかもしれない。ただし、それを是認するのは、逸脱の後に新たな規範の創造の芽が見出される限りにおいてである。

しかし、本調査結果が示唆するのは、２本目の軸として友との関係を重視という傾向が見出されたものの、より積極的に彼ら彼女からが独自に創造しつつある文化としての規範にまで及ぶものとは理解できなかったことも指摘せざるを得ない。既存の規範を批判するものの、新たな規範を見出せずに身近な友との関係に依存する、という閉じた構造が存在しないか。さらに身近な友との関係重視とは、何も新しいことではなく、戦後日本社会を特色づけた間人主義の縮小再生産のように思えてならない。

さまざまな逸脱行動も大人社会への反発というよりも、仲間の目のみを意識した行動とすれば、企業社会の中で会社の論理と倫理にとらわれてきた親の世代と何ら変わらないことになってしまう。規範意識の低下を嘆く側と嘆かれる側の距離は、案外近いかもしれない。違うのは規範を共有する仲間の特性であって、自己の内的規範より仲間との関係を重視する規範意識の構造自体に大きな変化はないのかもしれない。

しかし、そのような日本的間人主義が、良くも悪くも克服せざるを得ない課題になっていることは周知のとおりであろう。とすれば、いま問題とされる子どもや若者の規範意識の低下とは何なのか。単に捨てるべき規範への郷愁にすぎないのか。あるいは、より積極的に内在化すべき規範を見出せないアイデンティティクライシスの現代版なのか。あるいは、全く新たな人を人として教え育てる制度の誕生を求める子どもたちの悲鳴にも似た行動なのか・・・。

以上、数量化やクラスタ析出過程で分析者の脳裏に浮かんだ事柄の一端を思い出すままに提示してきたが、言うまでもなくこのような解釈には、データではなく分析者自身の観点が多分に加味されていることは理解されよう。したがって、上記の事柄は本分析の結果明らかになったことでもない。あくまで私見である。あえて言えば、先に紹介した分析データを読む際のモデルを提示したにすぎない。モデルである以上、否定されることを前提に提示した。

データが示す事実は一つでも、その事実が示唆する意味の範囲は、それを読み取る人の数だけあると言っても過言ではない。先に、「その解釈は本報告書を読まれる方にゆだねたい」と記した理由である。

したがって、本来ならば、このあと上記の分析に基づき分析者自身の観点から施策への課題を提起すべきだが、これまで幾たびか述べたきた理由により、分析結果の紹介で本調査報告を止めたい。

なお、上述した部分も含めて、分析者自身の視点を加味した施策の方向については、本調査の実施主体である静岡県青少年問題協議会において提起し、その論議を経て世に問いたいと思っていることも記しておく。

青少年・保護者の規範意識に関する調査

結　果　報　告　書

平成13年３月

静岡県青少年問題協議会
静　岡　県　教　育　委　員　会

はじめに

近年の青少年非行の現状は、戦後第４のピークを迎え、非常に深刻な状況と言えます。また、倫理観に乏しくルールやマナーに反した行動をする青少年や自己中心的で目的意識を持たない青少年が増加していると指摘されています。

このような青少年問題の背景には、青少年を取り巻く家庭・地域の教育力の低下、様々なメディアによる多様な情報の氾濫、ひいては社会全体の価値尺度が「善か悪か」「正か邪か」ということから、「得か損か」「楽か辛いか」ということに移行しており、人間の価値も、専ら外面的な地位で評価してしまうという社会全体の意識に原因があると考えられています。

こうした青少年や青少年を取り巻く現状を踏まえ、第23期静岡県青少年問題協議会では、「青少年の規範意識を育てるために」をテーマに、その対策について協議することを決定しました。協議会では、青少年が育むべき規範とはどういったものか、大人の規範意識と青少年の規範意識には「ずれ」があるのではないか、ルールやマナーという目に見える部分の土台に目に見えない規範意識があり、その意識を育むことが大切である等の意見が出れました。

そして、青少年の生活意識や行動を調査し、青少年の規範意識低下の実態を明らかにすることの必要性が指摘され、また、保護者の規範意識も青少年の規範意識育成に大きな関係があることから、保護者調査も併せて実施することになりました。

調査は、県下の小学校・中学校・高等学校、また、幼稚園・保育所にも依頼し、青少年の規範意識が培われる過程での問題点やその背景にある社会環境や友人や保護者等の人間関係との関わりについて明らかにすることを主眼としました。調査票の作成や結果の分析には、本協議会委員の馬居政幸静岡大学教授、山本伸晴常葉学園短期大学教授、松永由弥子静岡県立大学短期大学部非常勤講師にお願いしました。また、静岡大学馬居研究室にも多大な御協力をいただきました。

本書は、調査結果を抜粋、要約したものです。調査に御協力いただいた関係者の皆様にく感謝申し上げるとともに、青少年の規範意識を育み青少年健全育成を推進する一助として、関係の皆様に御活用いただければ幸いです。

静岡県青少年問題協議会・静岡県教育委員会

目　次

第Ⅰ部　概要編

1．調査の目的…… 1
2．調査対象…… 1
3．抽出方法…… 1
4．調査数 …… 1
5．調査方法…… 1
6．調査期間…… 2
7．調査機関…… 2
8．摘要 …… 2
9．調査の構成…… 2
10．調査票の構成…… 2

第Ⅱ部　基礎集計編

1．青少年調査　①中・高校生調査　5

1．調査対象者の特性…… 5
（1）性別、学年、同居家族 …… 5
（2）１か月のおこづかい …… 7
（3）学習塾 …… 9
（4）学習塾以外の習い事 …… 11
（5）部活動 …… 13
（6）社会活動 …… 14
（7）奉仕活動 …… 16
（8）アルバイト …… 17

2．情報環境…… 20
（1）自分の部屋 …… 20
（2）所有している電化製品 …… 21
（3）平日のテレビ・ビデオ視聴時間 …… 23
（4）ゲームのプレイ時間 …… 24
（5）インターネット …… 25
（6）読んでいる雑誌 …… 27

３　親友との関係 …… 30
（１）親友の有無 …… 30
（２）親友がいないことについて …… 31
（３）親友について …… 33
（４）親友との関係 …… 35

４．父母との関係 …… 38
（１）父親との関係 …… 38
（２）父親の理解度 …… 39
（３）父親の理解度と父親との関係との相関 …… 40
（４）母親との関係 …… 42
（５）母親の理解度 …… 43
（６）母親の理解度と母親との関係との相関 …… 44

５．規範意識 …… 46
（１）ある場面での行動や感情 …… 46
（２）自己行動分析 …… 50
（３）自己性格分析 …… 52
（４）クラスの人への対応 …… 54

６．今後の活動 …… 56
（１）してみたい活動 …… 56

１．青少年調査　②小学生調査　58

１．調査対象者の特性 …… 58
（１）性別、同居家族 …… 58
（２）１か月のおこづかい …… 60
（３）学習塾 …… 61
（４）学習塾以外の習い事 …… 62
（５）社会活動 …… 63
（６）奉仕活動 …… 65

2．情報環境…… 66
（1）自分の部屋 …… 66
（2）所有している電化製品 …… 67
（3）平日のテレビ・ビデオ視聴時間 …… 68
（4）ゲームのプレイ時間 …… 69
（5）インターネット …… 70
（6）読んでいる雑誌 …… 71

3．親友との関係…… 72
（1）親友の有無 …… 72
（2）親友がいないことについて …… 73
（3）親友について …… 75
（4）親友との関係 …… 77

4．父母との関係…… 79
（1）父親との関係 …… 79
（2）父親の理解度 …… 80
（3）父親の理解度と父親との関係との相関 …… 81
（4）母親との関係 …… 83
（5）母親の理解度 …… 84
（6）母親の理解度と母親との関係との相関 …… 85

5．規範意識…… 87
（1）ある場面での行動や感情 …… 87
（2）自己行動分析 …… 91
（3）自己性格分析 …… 93
（4）クラスの人への対応 …… 95

6．今後の活動…… 97
（1）してみたい活動 …… 97

２．保護者調査 99

１．調査対象者の特性 …… 99
（１）続柄、子ども …… 99
（２）同居家族 …… 101
（３）職業 …… 102
（４）年齢 …… 103
（５）社会活動 …… 104
（６）奉仕活動 …… 106

２．子どもとの関係 …… 107
（１）平日に子どもと顔を合わせている時間 …… 107
（２）子どもとの関係 …… 108
（３）子どもへの理解度 …… 111
（４）中学生への理解度と子どもとの関係との相関 …… 112

３．子どもを取り巻く環境認識 …… 113
（１）子どもの規範意識低下について …… 113
（２）子どもの望ましい成長・発達に必要なこと …… 114

４．子どもの規範意識と保護者の規範意識 …… 116
（１）子どもの行動分析 …… 116
（２）ある場面での行動や感情（保護者自身） …… 118
（３）ある場面での行動や感情（子ども） …… 122
（４）自己性格分析 …… 126

５．期待される行動と期待する行動 …… 128
（１）してみたい活動 …… 128
（２）してほしい活動 …… 130
（３）ルールをやぶった子どもへの対応 …… 132

第Ⅲ部　分析編

1．親と子の相互理解についての考察
（静岡県立大学短期大学部非常勤講師　松永由弥子）……135

2．奉仕活動の義務化と保護者の意識についての考察
（常葉学園短期大学教授　山本伸晴）……142

3．中高生の規範意識についての多変量解析による考察
（静岡大学教育学部教授　馬居政幸）……148

第Ⅳ部　資料編
（質問と単純集計表）

●中・高校生用……165

●小学生用……183

●保護者用……198

第Ⅰ部　概要編

１．調査の目的

近年の青少年非行の現状は、深刻な状況である。また、規範意識が低下した青少年の増加が指摘されている。

青少年の規範意識の低下を分析するためには、青少年の規範意識が培われる過程での問題点やその背後にある社会的基盤（社会環境や友人・保護者等との人間関係など）との関わりについて明らかにする必要がある。また、青少年の規範意識低下の現状把握だけに止まらず、青少年が属する集団がどのような規範意識を持ち、どのような規範意識に対する価値観を持っているのかを明らかにする。

これらにより、これからの社会が求める規範意識を探り、積極的な施策を展開するための基礎資料を得ることを目的として調査を行う。

２．調査対象

（１）青少年調査

県下の小学５年生、中学２年生及び高校２年生

（２）保護者調査

調査対象となった中学２年生の家庭及び県下の幼稚園・保育所に通う子どものいる家庭の保護者

３．抽出方法

対象者の抽出にあたっては、以下の点に留意した。

・小・中・高校生については、クラス単位で抽出
・東部・中部・西部、都市部・町村部の地域について考慮
・高校については、普通高校、専門高校、定時制高校についても考慮
・保護者については、各家庭で父親、母親から回答が得られるよう考慮

４．調査数

	配布数	回収数	回収率（％）
青少年調査	1,946	1,887	96.9
小学生	636	627	98.6
中学生	666	649	97.4
高校生	644	611	94.9
保護者調査	1,398	1,292	92.4
幼稚園・保育所	720	692	96.1
中学生	678	600	88.5
全体	3,344	3,179	95.1

５．調査方法

・幼稚園、保育所、学校を通じた配布、回収
・無記名方式

６．調査期間

平成 12 年 12 月

７．調査機関

株式会社　サーベイリサーチセンター　静岡事務所

８．摘要

（１）すべての集計表は、小数点第２位を四捨五入して算出した。したがって、回収比率を合計しても 100％ちょうどにはならず、１％の範囲で増減することがある。

（２）回収の比率（％）は、その設問の回答者数を基数（ｎまたは件数）として算出した。したがって、複数回答の設問はすべての比率を合計すると 100％を超える。

（３）報告書中のグラフはグラフの種類によって、回答比率５％以下は四捨五入もしくは表示しないものがある。

（４）集計表中などの個別の調査数には「不明」は含めていない。

例：中高生・性別などは、所属が解っていても性が不明なら全体には含まれるが、個別には出力していない。

９．調査の構成

中学生を調査対象の中心に据え、３種類の調査を実施した。

（１）青少年調査（中・高校生用）

中学生を基準に、規範意識形成過程把握のための高校生との比較を前提として、中・高校生がともに回答可能なものとして作成し、高校生のみ選択する質問項目を付加した。

（２）青少年調査（小学生用）

規範意識形成過程把握のための中・高校生調査との比較を基準に、中・高校生への質問項目や質問内容の中から、小学生が回答可能な観点から選択・修正することによって作成した。

（３）保護者調査

規範意識形成過程と保護者の課題把握のために、中学生の保護者と幼児期（幼稚園・保育所）の保護者並びにそれぞれの父母が回答可能なものとして作成した。

10．調査票の構成

（１）中・高校生用、小学生用

①フェイスシート（Ｆ１～Ｆ11）

調査対象者の基本的属性に加えて、規範意識の社会的基盤や新たな規範意識提示の基礎資料把握のために、部活動並びに学校以外の学習状況や社会的経験に関する項目を付加した質問により構成。

②Ｑ１～Ｑ６

規範意識の社会的基盤を把握するために、中学生の社会環境として最も影響力があると思われるメディア環境と新たな情報環境との関係についての質問により構成。

③Ｑ７～Q11

規範意識の社会的基盤を把握するために、中学生の人間関係の中心にある友人への意識と関係並びに父親、母親との関係とそれらの相互比較のための質問により構成。

④Q12

規範意識の現状を多面的に把握するために、中学生の日常生活の多様な場面における判断基準を解明するための質問内容により構成（二者択一のため、用意した選択肢以外の選択肢を想定することは可能だが、あえていずれかを選択させることにより、判断基準を析出する調査手法を用いた質問）。

⑤Q13

規範意識の現状を多面的に把握するために、中学生の行動特性に関する質問内容により構成。

⑥Q14

規範意識の現状を多面的に把握するために、中学生の自己評価に関する質問内容により構成。

⑦Q15

規範意識の現状とその社会的基盤を把握するために、他者の行為への行動規範とその課題解明のための質問内容により構成。

⑧Q16

これからの社会が求める新たな規範意識提示の基礎資料とするために、これから求められる行動への意欲の現状を把握するための質問内容により構成。

※小学生の調査票は、ほぼ中・高校生用と同一であるが、その中で小学生では理解しにくい表現や回答しにくい質問を削除もしくは修正することによって構成した。

（２）保護者用

①フェイスシート（Ｆ１～Ｆ６）

調査対象者の基本的属性に加えて、社会的経験に関する項目を付加した質問により構成。

②Ｑ１～Ｑ２

子どもとの関係の比較（中学生）もしくは現状把握（幼児期）のための質問により構成。

③Ｑ３～Ｑ４

保護者独自の規範意識把握のための質問により構成。

④Ｑ５

中学生の行動特性と保護者の認識との比較のための質問内容により構成。

⑤Ｑ６

中学生並びに保護者の規範意識の現状並びに中学生と保護者間を比較するために、中学生と類似した日常生活の多様な場面における判断基準を解明するための質問内容により構成。

⑥Ｑ７～Q11

中学生自身の規範意識と保護者が認識する子どもの規範意識並びに保護者自身の規範意識・自己認識の現状と保護者間の比較をするための質問により構成。

第Ⅲ部　分析編

1．親と子の相互理解についての考察
（静岡県立大学短期大学部
非常勤講師　松永由弥子）

2．奉仕活動の義務化と
保護者の意識についての考察
（常葉学園短期大学教授　山本伸晴）

3．中高生の規範意識についての
多変量解析による考察
（静岡大学教育学部教授　馬居政幸）

1．親と子の相互理解についての考察

静岡県立大学短期大学部非常勤講師
松永　由弥子

はじめに

単純集計結果から保護者の規範意識に関連する考え方をみると、次の２点が指摘できる。第１は、「子どもたちの規範意識が低下した」との一般的な意見について、「まったくその通りだと思う」と「そういわれればその通りだと思う」と回答した比率を合計すると約８割となることから（P113）、多数の保護者が子どもたちの規範意識が低下していると考えている点である。第２は、子どもたちの望ましい成長・発達を促すために必要なことをあげる場合（P114）、その上位５項目の中に「家庭でしつけや生活習慣の指導をしっかり行う」、「家族の中で子どもの教育についての考え方をよく話し合う」が含まれており、子どもの望ましい成長・発達には「家庭」が重要な役割を果たしていると考えている点である。この２点をあわせてみると、保護者は子どもに「家庭で規範意識を伝えるべきである」と考えていることが予測される。

では実際に現在の家庭は、保護者が考えるような「規範意識を伝えられる家庭」となっているのであろうか。ある人が何かを他人に伝えようとした時、当事者間にはお互いの意思を相互に伝え合うコミュニケーション活動がとられるが、その際重要になってくることは、相手を「理解」して伝えようとする内容を適切に表現することであろう。規範意識のように人の意識や感情に関わるような内容であれば、より一層伝える相手を「理解」した上で、伝えたい事柄を表現することが重要になると思われる。はたして現在の家庭において、保護者は規範意識を伝えるべき相手の子どもを理解した上でそれを伝えているのであろうか。今回の調査結果に関して保護者調査と中学生調査とを横断的に考察してみると、上記のような疑問が生じてくるのである。

１．「親の子ども理解」についての認識のズレ

（１）「親の子ども理解」についての親子間、父母間の差

まず、親が子どもを理解するという場合の「理解」そのものに関する認識の違いが親子間、父母間で生じていると思われる。今回の調査では、小学生、中学・高校生に対しては「あなたのお父さん(お母さん)は、普段あなたの気持ちをわかっていると思いますか。」、保護者に対しては「お子さんの学校や園での生活の様子やお子さんの友だちなどについてどの程度理解していると思いますか。」という聞き方で、親が子どものことをどの位理解しているのかについて、子ども側の認識の程度と親側の認識の程度とをみてみた(図１)。

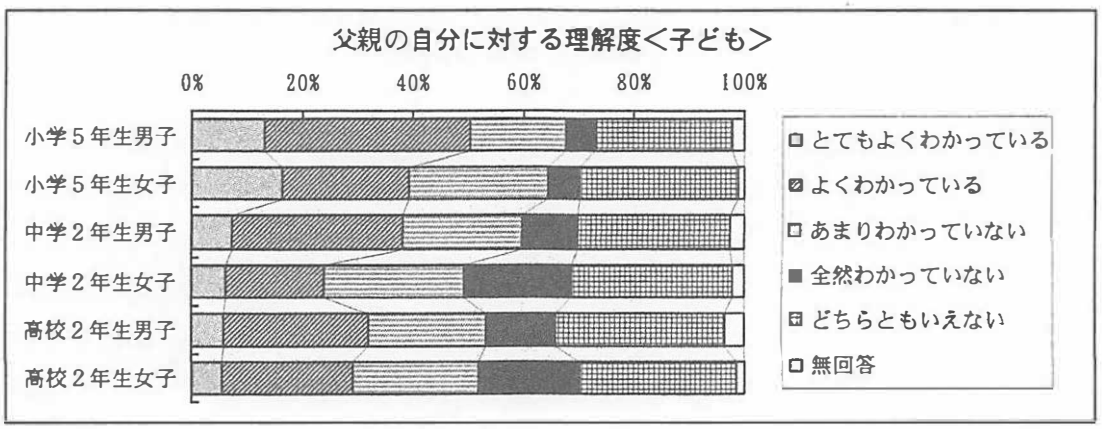
「父親がどの位理解しているか」についての子どもの認識をみると(図１上段)、女子の場合には中学生で「とてもよくわかっている」及び「よくわかっている」の比率が低下するが、高校生になるとそれが多少高くなる。この変化は思春期をへて成長していく子どもの一般的な意識変化を捉えた結果とみることができる。これに対して、男子の場合には、「とてもよくわかっている」及び「よくわかっている」の比率が高校生になるにしたがい減少してしまう。男の子にとって、父親は、子どもの成長に伴って「成人男性のモデル」として存在するのではなく、子どもにとってはますます自分のことをわかってくれない存在となってしまっているのである。

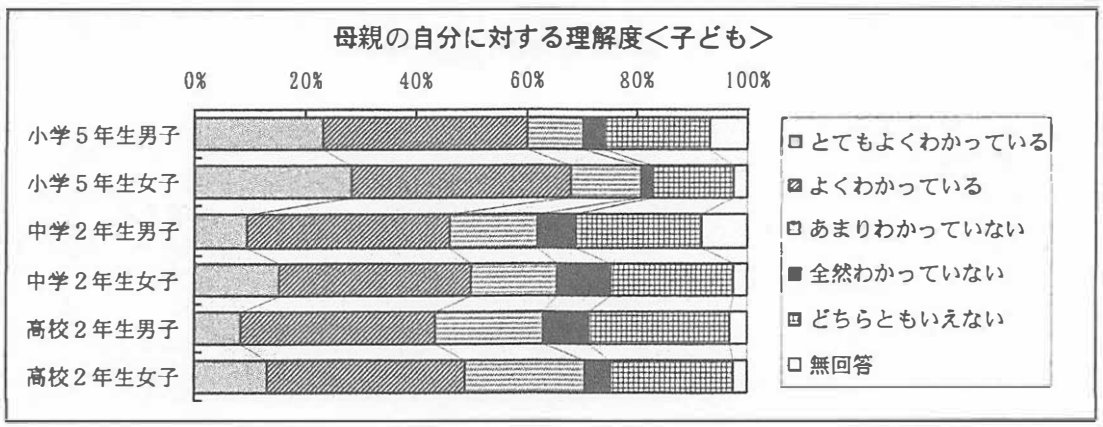
一方、「母親がどの程度理解しているか」についての子どもの認識をみてみると(図１中段)、男女とも「とてもよくわかっている」及び「よくわかっている」の比率が高校生になるにしたがい減少しているが、最も低い高校生の時点でも「とてもよくわかっている」及び「よくわかっている」の比率は男子で４割以上、女子では５割近くに達している。子どもにとって、母親は十分理解してくれる人という存在のようである。

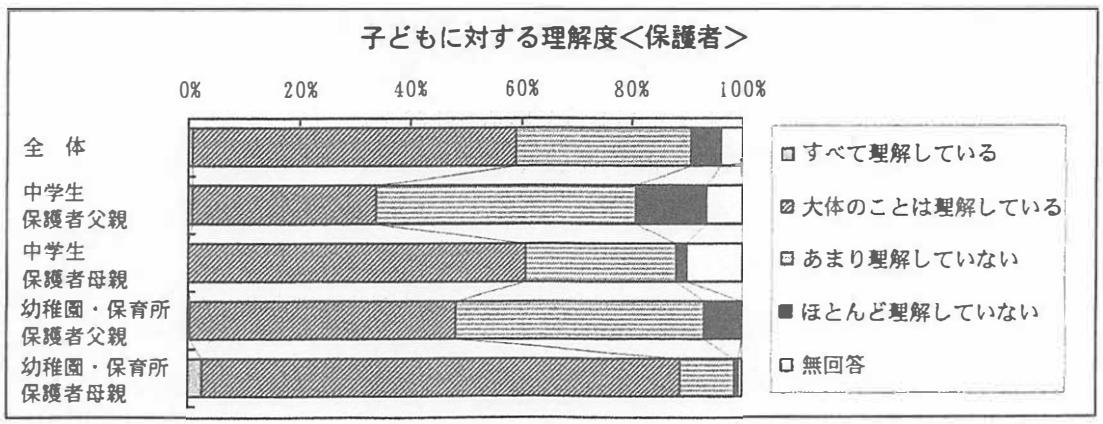
それでは、保護者自身は自分が子どものことをどの位理解していると考えているかというと(図１下段)、中学生の父親では「すべて理解している」及び「大体のことは理解している」の比率は４割にも満たないが、一方で中学生の母親ではそれらの比率は６割を超えている。この父母間比率の差には、子どもとの接触時間の父母間の差なども影響していると思われる。

それにしても、父親は子どもの認識以上に「自分は子どものことがわかっていないのではないか」と過少評価しすぎ、母親は子どもの認識以上に「自分は十分子どものことがわかっている」と思い込みすぎているのではないだろうか。同じ屋根の下に暮らしながら、子どもの理解をめぐる認識の差があまりに大きすぎはしないかと感じられた。

図１　子どもと保護者の理解度の比較







（２）「親の子ども理解」と関わりが深い行動（関係）についての親子間の認識の違い

次に、親の子ども理解度と日頃親子でとる行動との関わりをみてみると、親子間でその認識の違いがみられた(表１)。これは、親の理解度に関する質問への回答と父親(母親)と子どもの関係とをたずねた質問への回答との相関を、保護者調査と中学生調査で比較した結果、明らかになったことである(具体的な分析方法についてはＰ40、Ｐ44、Ｐ112 を参照)。

表１をみると、父親・母親の場合(上段)には、子どもへの理解度に好影響を与える相関係数の高い行動の上位４項目は、すべて子どもと何らかのことについて「話をする」ことである。これに対して、中学生の場合(下段)、親の理解度に好影響を与える相関係数の高い行動の上位５項目には、父親の場合、母親の場合双方に「話に感心する」「褒められる」ことが入ってくる。子どもは、単に親といろいろな話をするだけでなく、親に褒めてもらったり親が話してくれる内容に感心したりする中で、親が自分のことをわかってくれているのだなと感じているのである。このような子どもの気持ちは親子間で尊重されることが望ましいであろう。

表１　子どもの理解と関わりが深い行動（関係）の認識の違い

【父親の子ども理解度と行動の関連（父親の回答）】

ランク	項　目	相関係数
1	友だちのことについて話をする	0.381
2	担任の先生のことについて話をする	0.368
3	父親や母親のことについて話をする	0.337
4	部活動のことについて話をする	0.311
5	一緒に買い物に出かける	0.252
6	自分の性格や身体の悩みを相談される	0.236
7	話に感心する	0.234
8	休日に一緒に遊ぶ	0.230
9	褒める	0.225
10	将来の職業のことについて話をする	0.222
11	生や死について話をする	0.204
12	父親や母親の仕事について話をする	0.199
13	一緒にテレビを見る	0.188
14	叱る	0.180
15	手伝いをしてくれる	0.173
16	社会の出来事について話をする	0.134
17	異性のことについて話をする	0.133
18	勉強を教える	0.130
19	地域のスポーツ活動のことについて話をする	0.092
20	本気でけんかをする	0.056
21	気をつかう	-0.008

【母親の子ども理解度と行動の関連（母親の回答）】

ランク	項　目	相関係数
1	友だちのことについて話をする	0.399
2	担任の先生のことについて話をする	0.334
3	将来の職業のことについて話をする	0.239
4	部活動のことについて話をする	0.228
5	話に感心する	0.225
6	社会の出来事について話をする	0.215
7	一緒に買い物に出かける	0.213
8	異性のことについて話をする	0.192
9	自分の性格や身体の悩みを相談される	0.175
10	褒める	0.173
11	父親や母親のことについて話をする	0.154
12	父親や母親の仕事について話をする	0.138
13	生や死について話をする	0.129
14	休日に一緒に遊ぶ	0.128
15	一緒にテレビを見る	0.127
16	手伝いをしてくれる	0.120
17	勉強を教える	0.114
18	本気でけんかをする	0.087
19	地域のスポーツ活動のことについて話をする	0.043
20	気をつかう	0.039
21	叱る	0.018

【父親の子ども理解度と行動の関連（中学生の回答）】

ランク	項　目	相関係数
1	話に感心する	0.483
2	一緒にテレビを見る	0.399
3	褒められる	0.383
4	お父さんの仕事について話をする	0.371
5	友だちのことについて話をする	0.351
6	将来の職業のことについて話をする	0.346
7	休日に一緒に遊ぶ	0.340
8	部活動のことについて話をする	0.325
9	一緒に買い物に出かける	0.323
10	手伝いをする	0.310
11	担任の先生のことについて話をする	0.301
12	勉強を教えてくれる	0.281
13	社会の出来事について話をする	0.270
14	自分の性格や身体の悩みを相談する	0.253
15	地域のスポーツ活動のことについて話をする	0.225
16	お母さんのことについて話をする	0.211
17	生や死について話をする	0.142
18	異性のことについて話をする	0.129
19	気をつかう	0.071
20	叱られる	0.002
21	本気でけんかをする	-0.134

【母親の子ども理解度と行動の関連（中学生の回答）】

ランク	項　目	相関係数
1	話に感心する	0.511
2	褒められる	0.409
3	友だちのことについて話をする	0.336
4	自分の性格や身体の悩みを相談する	0.327
5	担任の先生のことについて話をする	0.293
6	休日に一緒に遊ぶ	0.242
6	社会の出来事について話をする	0.242
8	手伝いをする	0.240
9	部活動のことについて話をする	0.238
10	一緒にテレビを見る	0.236
11	勉強を教えてくれる	0.234
12	将来の職業のことについて話をする	0.224
13	一緒に買い物に出かける	0.223
14	お母さんの仕事について話をする	0.220
15	生や死について話をする	0.202
16	お父さんのことについて話をする	0.198
17	異性のことについて話をする	0.157
18	地域のスポーツ活動のことについて話をする	0.133
19	気をつかう	0.090
20	本気でけんかをする	0.019
21	叱られる	0.001

2．子どもの行動や意識の理解不足

「子どもを理解する」こと自体に親子間、父母間で認識のズレが生じていることについて述べてきたが、調査結果からは、これだけでなく、実際に保護者は子どもを理解しているのだろうかと疑問を抱く傾向がいくつかみられた。その中の３点をここでは指摘しておこう。

（1）子どもの行動への理解不足

今回の調査では、子どもの日頃の行動について、中学生に自分の日頃の生活行動を回答させるだけでなく、保護者にも自分の子どものそれを答えてもらった。それぞれの回答結果の上位５項目をまとめたものが表２である。

保護者は、家の中で子どもがとる行動を中心に大方のことは把握しているようではあるが、「コンビニによく行く」ことについては、保護者の回答では４割台であるのが中学生の回答では６割台と２割ほどの差がみられる。コンビニは子どもにとっては単なる買い物の場所というだけでなく、あらゆる情報の収集場所ともなっている可能性がある。そのような場所の利用頻度については保護者も把握する必要があるように思われる。

（2）ルールを破ったことに対する認識の違い

いくつかの一般的なルールについては、中学生に対してはクラスの人がそれらのルールを破ったときにどのように対応するか、保護者に対しては自分の子どもがそれらのルールを破ったときにどのように対応するかをたずね、ルールを破ったことについての認識を比較してみた(図２)。回答選択肢が違うため、単純に比較することはできないが、中学生の方が保護者に比べて「タバコ」「飲酒」「援助交際」に対する容認の比率の高い傾向がみられる。保護者が善くないと思っていることが子どもに伝わっていない点もあるということの表れではないだろうか。

（3）ある場面でとる行動や感情の認識の違い

さらに規範意識と関わる点においての親子間のズレがみられる調査結果を指摘しておくことにする。ある想定場面において二者択一でどちらかを選ぶ問いを設け、中学生には自分がどちらを選ぶか、保護者には自分の子どもがどちらを選ぶと思うかをたずねたところ、18 問中、７問で親子間の回答パターンに違いがみられた(表３)。特にその中でも違いがみられるのは「夜遅くに友だちから「会いたい」と電話があった時」「万引きしたノートを友だちからもらった時」「買ったばかりの参考書をなくしてしまった時」であった。

回答パターンに違いがみられる設問の場面を分析すると、「友達と関わる場面」「子どもの自立心やプライドに関わる場面」に大別されると考えられる。子どもは保護者が思っている以上に友達との関係を重視し、それを基準(規範)としていること、また、中学生になれば保護者が思っている以上に自律性を有していることが指摘できるであろう。

これらのことから、今後家庭において規範意識を伝えていくためには、まず親子間の相互理解を促す必要があると思われる。

表２　保護者の中学生の生活行動への理解不足

【子どもの生活行動　上位５項目】

（単位：％）

			第１位	第２位	第３位	第４位	第５位
そう	中学生全体		コンビニによく行く 62.6	学校に行くのが楽しい 61.3	暇な時は部屋でぼんやり過ごす 58.6	休日は必ず出かける 55.0	新発売のお菓子や飲み物を買う 53.9
	中学生	男	コンビニによく行く 69.1	学校に行くのが楽しい 60.9	休日は必ず出かける 60.6	新発売のお菓子や飲み物を買う 55.0	暇な時は部屋でぼんやり過ごす 53.2
		女	暇な時は部屋でぼんやり過ごす 64.4	学校に行くのが楽しい トレンディ・ドラマは必ず見る 61.8		新しいお店などができると必ず行く 58.6	コンビニによく行く 55.3

※全体の第２位「学校に行くのが楽しい」は保護者の調査項目にはない、参考のため全体の第６位は、「トレンディ・ドラマは必ず見る」で 53.5％である。

【保護者が思う子どもの生活行動　上位５項目】

（単位：％）

		第１位	第２位	第３位	第４位	第５位
そうである	全体	好きなテレビ番組はビデオに録る 53.3	マンガ・アニメに詳しい 53.2	コンビニによく行く 46.2	暇な時は部屋でぼんやり過ごす 40.5	新発売のお菓子や飲み物を買う 33.3
	父親	マンガ・アニメに詳しい 56.0	好きなテレビ番組はビデオに録る 53.8	コンビニによく行く 47.7	暇な時は部屋でぼんやり過ごす 41.5	休日は必ず出かける 35.4
	母親	好きなテレビ番組はビデオに録る 53.0	マンガ・アニメに詳しい 50.8	コンビニによく行く 44.5	暇な時は部屋でぼんやり過ごす 40.4	新発売のお菓子や飲み物を買う 33.8

図２　ルールをやぶったことに対する中学生と保護者の認識の違い

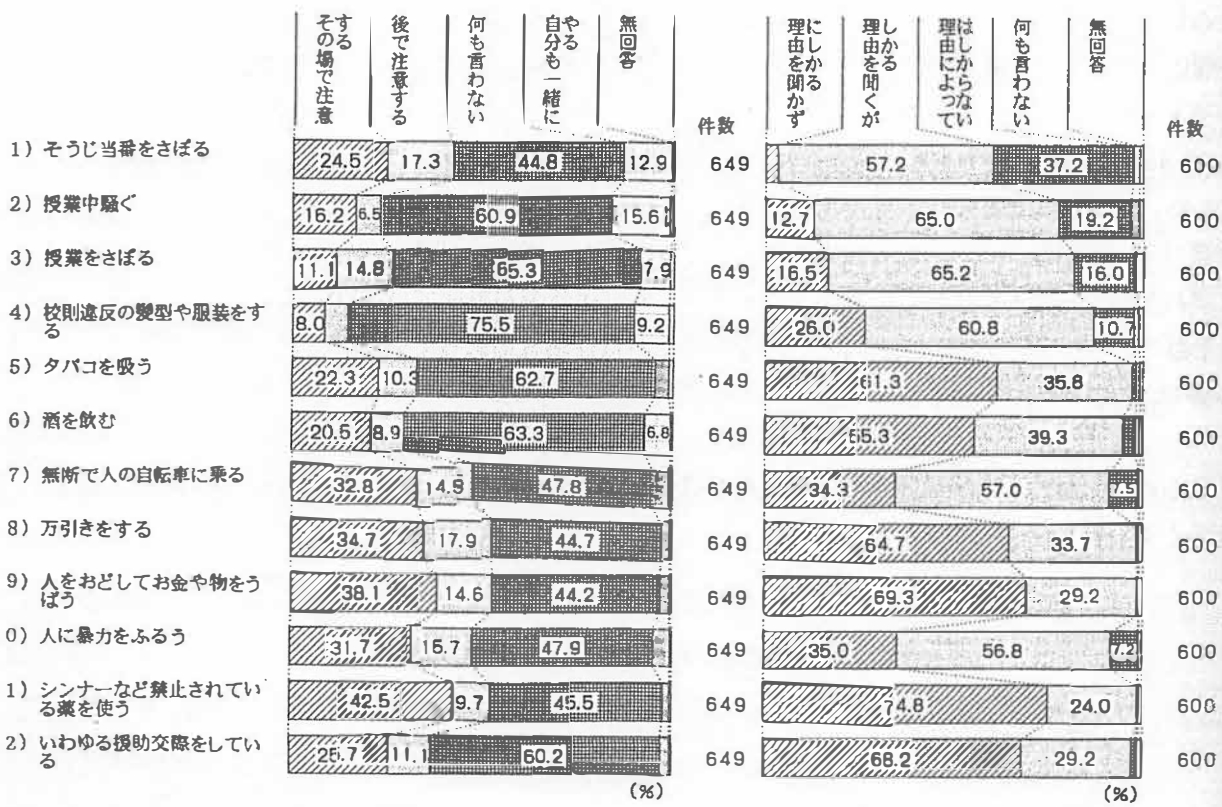


表3　ある場面においてとろうと思う行動（二者択一）

（保護者の回答は自分の子どもがとると思う行動の比率）

（%）

設　問	選択肢	中学生		保護者	
		男	女	父	母
一緒に学校に通っている友だちとけんかをした時	自分から謝って一緒に学校に行く	66.5	69.9	52.0	54.3
	友達が謝ってくるまで一緒に行かない	32.9	28.2	41.2	37.9
友だちは１００点なのに、自分は取れなかった時	頑張っているんだなと感心する	50.6	48.9	66.8	69.4
	負けてしまってくやしいと思う	49.4	50.8	30.0	29.0
友だちに自分の短所を指摘された時	「言われなくてもわかっている」と思う	50.6	44.7	65.0	62.5
	素直に「直そう」と思う	49.1	55.0	30.3	34.7
授業中に友だちが話しかけてきた時	「授業中だよ」と注意する	19.4	15.9	36.8	28.7
	一緒に話をする	80.6	83.5	57.8	68.8
夜遅くに友だちから「会いたい」と電話があった時	親に怒られるから断る	51.8	44.3	85.6	88.3
	親に怒られても、友だちに会いに行く	48.2	55.0	11.6	10.7
万引きしたノートを友だちからもらった時	そのまま使う	38.8	33.0	18.4	14.8
	絶対に使わない	60.9	67.0	76.5	82.6
買ったばかりの参考書をなくしてしまった時	あきらめて、新しく買う	15.9	12.9	42.2	33.1
	見つかるまで探す	84.1	87.1	54.2	64.0